



通信

NPO法人民謡民舞公演実行委員会

第 6 号

発行 2024/8/17

発行NPO法人民謡民舞公演実行委員会

発行人編集人

三宅良二

〒267-0053

千葉市緑区高津戸町

309-44-305

☎043-310-6175

民謡民舞の祭典「春の華まつり二〇二四」が開催されました。

令和六年度民謡民舞の祭典「春の華まつり二〇二四」が江東区の亀戸文化センター・カメリアホールで、出演者、スタッフ総勢九十名、大勢のお客様をお迎えし開催されました。令和三年に設立され発足公演を皮切りに、九回目となる公演です。出演者はきん弥会社中、石川きよ美、田中志郎、福田順次、安来節、保存会大江戸支部、外崎充男、澤乃唱子他澤乃会社中、米倉奈津子、大槻里子、鈴木サタヨ、英昌会社中、山登秀夫、上石由男、安井喜久子、楡原美佐子、武藤京子、清水和奈美、坂東春雅実、木原周謡、手踊りハッピー会社中、江口和子、鈴木久子、小熊晴麗、宮本星宝舟、増田衣美、中澤美喜雄、勝田正子、朴俊希、宇野きん弥、田中秀子、浜田てるみ、佐藤みね子、曾田キヨ、坂田せつ子、岩永よしえ、富田成子、野村あや子、富士豊美香、栗原啓武、椿俊太郎、原田英昌、上村正春、白戸久雄、増田龍鳳、藤田周次郎、高津秀恵、高橋秀翠、上野秀登、加賀弘子、増田龍宝泉、坂東末都伎、御崎京子、真樹邦佳、三宅良二、笹本壽、鶴家奏英、米谷智、山根青童、西田美和、西川啓光、荒井ふみ子、司会は峰田雅葉（敬称略順不同）の皆さま。唄あり、踊りあり、唄う喜び、踊る喜びを感じる舞台でした。









第二回千葉の民謡を唄おう 「民謡日本一選手権」 が開催されました

第二回千葉の民謡を唄おう「民謡日本一選手権」が令和六年六月二日、習志野市のプラッツ習志野市民ホールで開催されました。

当日は千葉県内はもとより、東京・埼玉・神奈川や茨城県からも参加頂き「千葉の民謡の部」「全国の民謡の部」の二部門で競われました。それぞれ上位五名で優勝決定戦が行われ「千葉の民謡の部」の優勝者は「朝の出がけ」を唄われた上村正春さん。上村さんには千葉県知事賞と副賞が贈られ、「全国の民謡の部」の優勝者「菅笠節」を唄われた甲斐美千加さんには習志野市長賞と副賞が贈られました。入賞者(以下敬称略)は「千葉の民謡の部」準優勝「木更津甚句」荒古隆生(東京都) 第3位「利根の舟こぎ唄」沼澤慶彦(千葉市) 第3位「白浜音頭」正田麻桜(東京都) 優秀賞「木更津甚句」工藤ユキ子(東京都) 「白浜音頭」大河内美紗(東京都) 「九十九里大漁木遣り唄」松浦一雄(富津市) 「夷隅川舟唄(出船)」清水研汰(東京都) 「朝の出がけ」菊池セイ子(東京都) 「全国の民謡の部」準優勝「十勝馬唄」高木愛(浦安市) 第3位「南部馬方節」及川克四郎(埼玉県) 優秀賞「津軽あいや節」工藤ユキ子(東京都) 優秀賞「江差追分」福地晃一(東京都) 「秋田馬子唄」由利東治(習志野市) 「秋田追分」荒古隆生(東京都) 「玉川くだり」鈴木京子(野田市)、その他、傘寿以上の方には感謝状を、開催日にちなんで一の位に六



習志野市の宮本泰介市長(中央)と佐々木秀一市議会議員(左)



「全国の民謡の部」優勝の甲斐美千加さんと、特別賞の甲斐心琉さん親子



「千葉の民謡の部」優勝の上村正春さん

と二の付く順位の方には景品(お米券)が贈呈されました。また、房総の民謡と郷土芸能として、「九十九里大漁木遣り唄」「龍鳳会中の踊り」「江戸川船頭甚句」「鶴家英会様の皆様の二宮神社の神楽が披露されました。

村に唄会がやって来る！

津軽民謡 ビクター専属 白戸久雄

待ちに待った唄会がやって来る。母に手を引かれ、津軽民謡の数々、津軽三味線と、嬉しくて、嬉しくてたまらなかつた。早速翌日仲良しの友達を呼んで、唄会の真似事です。自分はリンゴ箱の上に乗り、友達には、三味線の代わりに、ホウキを持たせジャジャンと口三味線で、じょんがら節や、あいや節を唄っていました。唄が好きで好きで、そんな遊びをしていた小学生時代でした。その後、歌謡界に「三橋美智也」が登場し、今度は三橋さんの歌に憧れ歌謡曲を唄うようになりしました。

その頃田舎でも、のど自慢大会が盛んで、おぼえて居るかい故郷の村を、と三橋美智也さんの「りんご村から」や「哀愁列車」等々。中学生の頃でした。そこそこ上位入賞したこともありました。時は流れ東京五輪のあった昭和三十九年、二十歳の時に上京。縁あって、とある文具会社に就職。テレビの「のど自慢大会」にも出ました。その後歌謡曲のレッスンを受けましたが、なかなか思うように、いきませんでした。

幼いころ親しんだ民謡。憧れの民謡との出会い。どこへ行ったら民謡に会えるのか。文具会社を辞め、自動車部品製造の会社に転職し、そこで民謡の好きな人に出会いました。長い長い月日でした。昭和四十七年、二十八歳、長男の知也が生まれた年でした。大田区蒲田の「太鼓」と言う民謡酒場に連れて行かれました。お店は二階でした。待ちに待った民謡津軽三味線の音が聞こえ、身体がジャワ

メグ（津軽弁）、震えたことを覚えてます。あまりにも長い月日でした。津軽三味線は後藤与恵男先生の音色でした。民謡酒場「太鼓」には山本謙司先生、小松祐二先生が。今思うとそうそうたる先生方がいらっしやいました。三味線に合わせて唄ったことがなく、何も知らない私が、そこそこ唄いました。間が合わない、「津軽あいや節」を唄っていました。



人生が変わる、人生を変えよう。そう思い早速、後藤与恵男先生に師事、唄の勉強が始まりました。唄うのが楽しくて楽しくて、どうにも堪りませんでした。山本謙司先生に日民に入って大会に出るようになり、と勧められました。そして日本民謡協会に入会。昭和四十九年全国大会青年部旗戦優勝。その後、昭和五十一年日本郷土民謡協会東京大会、津軽小原節で優勝。

妻、昭子とは今で言う社内結婚で昭和四十三年十一月十一日に結婚し、昭和四十五年長女保子が、昭和四十七年には長男知也が生まれました。昭和五十七年からは東横線綱島駅の近くで民謡とカラオケの店「スナック壺天」を家族の協力のもと、お客様にも恵まれ、お陰で二十年経営させて頂きました。

思い起こせば、遠い昔のようでもあります。この間の出来事のようにも思われ、身と、声の続く限りお邪魔にならないうよう津軽民謡を愛してまいります。



ハッピーです

手踊りハッピー会会主 江口和子

昭和十三年山形県新庄町で生れ。寅さん風に言えば「わたくし 生れも育ちも山形の新庄 最上川で産湯を使い 姓は江口、名は和子 人呼んでハッピーと発します」



十七歳の時、理容師を目指し上京。まだ修行中の二十歳の時、五歳年上の江口好也さんと結婚。二人の子宝、娘に恵まれました。当初は横浜の子安に住んでいましたが、昭和四十年に川崎市幸区小倉に移り、「江口理容店」を開業。昭和五十年にお店を改装「バーバー・ハッピー」に店名変更して再開。昭和六十一年、四十八歳の時には運転免許を取得しました。が、家族の勧めもあり今年免許を返納をする予定です。

私は「津軽民謡」という唄の存在を知りませんでした。友人に誘われて行ったのが、ピクチャーレコード専属の白戸久雄先生でした。その魅力にとりつかれて弟子入りし、以来ご指導を頂いています。稽古をやり過ぎたせいか、元々なり易い体質なのか、平成四年と平成六年に声帯ポリープの手術を受け、更に平成八年に三度目のポリープができ、唄うことを断念せざるを得ない事態となりました。そんな時、友人に誘われて行ったのが、津軽手踊りの故宇野きん子先生でした。平成八年、五十八歳の時でした。炭坑節しか踊ったことが無い私でしたが、故宇野きん子先生にご指導頂き、平成十六年第三回青森民謡民舞コンクール全国大会個人踊りの部で優勝させて頂きました。その時頂いた賞状やトロフィー、写真をリビングに飾っています。六十六歳の時でした。私にとって大切な思い出です。その後、平成二十二年に「手踊りハッピー会」を結成し、仲間と踊りを楽しんでいます。平成二十年には、川崎で子供や孫に囲まれて金婚式のお祝いをして頂きました。ホッとしたのか、お祝いの翌日に、夫の好也が川崎の鋼管病院に入院

し、その二十日後にそのまま永眠しました。七十五歳の生涯でした。夫とは二人三脚で理容店の経営し、子育てにも協力してくれ、尺八を習ったりもしてくれた本当に優しい夫でした。

今回人生を振り返る、いい機会と思い寄稿させて頂きました。これには以前、孫が作ってくれた「江口和子の一生」と題した一覧表が役に立ちました。横軸に年齢・年月日・出来事を、縦軸にその時の年齢等が記載されたものです。

夫や子供、孫、お店ではお客様に、民謡や踊りの先生や仲間にも恵まれ、幸せな人生だと感じています。本当にハッピーハッピーバーバーです。

体調を崩し、ご心配もお掛けしましたが、ようやく元氣になり、残された人生身体の続く限り、踊りに民謡を楽しんでいこうと思います。また皆様にお会いするのを楽しみにしております。

今は亡き三代目長谷川 栄八郎先生との思い出話

津軽民謡 鶴藤会会主 佐々木鶴藤

本名佐藤松雄、大正八年、一九一九年生れ。母親は川山千鳥女師である。

「津軽民謡」百五十年の歴史の中で、これ程多くの芸人唄い手、三味線奏者の人達と交わった人は居ただろうか。そのほんの一部を記します。

母親の川山千鳥さんは、あの初代長谷川栄八郎さんの師匠であり、初代は二十五歳で独立されたとのこと。初代栄八郎師が作られた、津軽数え唄の大元とも言える「日本一数え唄」は大変有名で

す。一番から五番まではレコード等に収録されていることが多いですが、収録時間の関係か。特に時間が許せばまたの機会に、六番から十番までを書き残したいと思っています。

昭和三十年代に東京へ出て、文京区の駒込六義園近くのライオンズマンションに住んでおられ、現在の日本郷土民謡協会本部のすぐ裏手で五十メートルと離れて居ないところでした。本部での大会打ち合わせの後、加藤訓理事長をご案内したことがありました。お二人の出会いが浅草の民謡酒場「七五三」で、三代目長谷川栄八郎先生が芸能部長、津軽三味線は、澤田勝秋師、五錦竜二師、大條由雄師で、加藤訓師は当時、ご自身の言われるには「使い走り」だったそうです。三代目長谷川栄八郎先生が九十二歳の時にお二人で記念撮影されたことがありました。そのことは加藤理事長のブログですぐに紹介されていました。参考までに検索して見てください。

さて私事です、嬉しかった出来事の一つが、三代目九十五歳の時、NHK総合テレビ「ゆうどきネットワーク」偉大なるお年寄りが放送され、司会者の毒蝮三太夫に丁寧で紹介された事が懐かしく



思い出されます。十八番の津軽小原節・水戸黄門物語の伴奏をさせて頂き、一緒に収録に参加させて頂きテレビに出させて頂いたのはこの上ない喜びで、いい思い出になっています。三代目長谷川栄八郎先生には長年ご指導いただき、特に大好きな浪曲風の新米山甚句も伝授頂いたことで、長谷川栄八郎師の相三味線で唄わせて頂いています。

話は変わりますが、ある時、千葉県木更津市の吉田さんの仲介で平成二十三年頃、今は亡きあの三橋美智也さんの「みちや会」本部代表青森市在住の工藤隆さんから、昔の美智也さん少年時代の話を聞きに、吉田氏と二人で伺った折、座敷に上げて頂きました。美智也少年は九歳で江差追分のチャンピオンになり、お母様は自身も舞台で太鼓を叩きながら美智也少年を舞台へ送り出す、その時の一部始終を伺いました。当時の美智也少年は身体が小さく、浪曲師が使ったテール掛けの上に座布団を敷き、唄っている間に、お客様からの投げ銭が気になって唄いに集中できないことがあり、唄い終



わって楽屋で、お母様に叱られていたこと、懐かしい話を工藤隆会長、九十歳とは思えない元気な声で話されました。その後のお付き合いで、年に三・四回みやちや会の会報が送られてきています。一昨年三橋美智也さん没後二十七回忌が浅草ビューホテルで行われ、私も出席させて頂きました。九重佑三子さんのお姉さんと同じテーブルになり楽しいひと時を過ごしました。

最後になりますが、先日文京シビックホールでの日本郷土民謡協会春季大会で、会員の及川克四郎さんがハイライト民謡チャンピオンの部で「道南口説節」を唄い見事優勝して文部科学大臣賞に輝きました。私齢七十八歳過ぎてお弟子さんにも恵まれ、まだまだ楽しい事が続いています。この紙面をお借りして改めて多くの民謡関係者の皆様に厚く御礼・感謝申し上げます。ありがとうございます。

◎三橋美智也さんを偲ぶ会



ウズベキスタン 第二回マコンアート国際 フェスティバルザミーン 令和六年六月二十六日か ら七月二日 訪問記 鈴木亜由美

五月下旬、三宅理事長から超びっくり緊急の連絡が入りました「鈴木さん、ウズベキスタンに行ける？」なんのこっちゃ？突然のお電話に信疑の程、困惑でしたが、一時間後には信頼する三宅理事長の話として、せっかくの機会ですので、お受けすることを伝え、大使館と間に入ってくださいました。それから数週間後、主催者の厳格な審査が通りフェスティバルへの参加が決まりました。しかし、伴奏者もない状況で民謡を唄うにはどうしたらよいのか？たった一人で国際フェスティバルに挑まなければならぬとは、なんと無理で過酷なことか。十五分の枠があると聞き、まず、曲を決めるところからです。悩んだ末、江差追分、道南口説き節、北海盆唄、磯節、南部俵積み唄の五曲を十五分に収まるように知人の音響に頼み、曲を入れてもらいました。USBに十分と十五分のパターンを作り、ウズベキスタンへ。仁川国際空港乗り継ぎでタシケント国際空港に着いたのが日本時間の日付が変わった十二時半。十五時間のフライトでした。空港の外に出ると、SUZUKI AYUMIのプラカードを持った十名ほどの政府関係者のお迎えが待っていました。その光景を目にするまで



は、不安だらけの移動でしたが、やっとひと安心。ホテルまで直行です。

二日目の朝大型バスで他のフェスティバル参加国の方々とステーションまで移動。ついて行けばどうにかなるだろう。こんな性格も良い時もあるかもしれない。列車に乗り驚いたのはフェスティバル参加者のみの貸し切り列車だったのです。揺られること二時間。そこには、溢れんばかりの人と歓迎のパレードが待っていました。そして、メルセデスベンツ製の二十人乗りのバスが十一台。私は先頭車両に乗りました。パトカーが先導し、赤信号もノンストップで十一台のベンツバスが連なって走る光景は二度と見ることはないと思いましたが、少しづつ分かってきたのは、国を挙げてのフェスティバル！ということでした。一時間程の場所に今回のフェスティバル会場がありました。それはそれは驚くほど大きな会場と舞台でした。セキュリティが厳重で一般客は入れないよう招待客のみの入場でした。そのはずですが、国内外の要人が次々と挨拶をしていました。そしてオプニングセレモニーは三時間にも及ぶ歌と踊りの祭典でした。

三日目の午前中にリハーサルを行い、ひとまずホテルに戻り、本番は今夜だといふので着物に着替え待機していました。さあ！いよいよ出発です。会場に到着し舞台裏で待機していると現地テレビジョンのインタビュースタッフも受けました。既に時間待ちでしたが、いざ本番、音は上手く流れてくれるか、歌詞は間違わないかなどが頭を巡りましたが、江差追分、道南口説節、北海盆歌、磯節、南部俵積み唄の曲を無事歌い切りしました。

四日目。フェスティバル会場ではない会場で歌ってほしいとの依頼が入りました。通訳と一緒に乗り込んだのはパトカーでした。私がキョロキョロと落ち着かない様子に、パトカーは悪いことをしなかったたので、パトカーは悪いことをした人が乗るものだから。というところ、あなただけを安全第一に守るのが私たちの務めです。こんな経験二度とない。・・・と思いました。真つ赤な夕日を背に移動していくと、会場に到着。こちらの場所でのコンサートでは歌や踊りを町のお年寄りから子供まで皆が楽しんでいました。たくさんの子供と一緒に写真を撮ってほしいと言われ撮りました。

二日目の朝から私は着物で過ごしていました。三日目はウズベキスタンの伝統織物「アトラス」で作った着物を橘先生から預かり着ていました。現地の方には、「アトラス」の着物をビューティフルと言ってもらっていました。諸外国の方々に写真を撮ってもらってもよいかと、何度も声を掛けていただき、「アトラス」や「振袖」の着物が外国では本当に珍しく美しいものであるということに、日本人としての誇りを感じました。

五日目はフィナーレ。三日間通訳のフェスティバルも最終日。八十か国もの参加のなかで、表彰式が始まりました。他人事のように手をたたき曲に乗っていると！JAPONIKASUZUKIAYUMI！なんとなんと私の名前が！周りの関係者たちが大騒ぎになるほど喜んでくれて、私は舞台へ。

大きな薔薇の花束と賞金を獲得致しました！とても夢のようでした。私の傍で通訳をしてくれていた「イゾザ」とハグ

をして喜びを共にしました。このフィナーレが終われば又、列車移動でタシケントへ戻りました。通訳のイゾザとも最後の夜になります。

私は今回のフェスティバルで着た振袖をイゾザにプレゼントしました。浴衣の帯なら簡単に結べるので帯もプレゼントしました。イゾザは早速振袖を着た写真を送ってくれました。帯もリボン結びが出来ていました。たった一度結んであげただけでしたがイゾザは結び方を見て覚えていました。感動でした。最後は二人で号泣しましたが、またいつか会える気がします。

このような素晴らしい経験をさせていただけたのも、理事長からのお声がけがなければ経験することはできませんでした。理事長ありがとうございます。

そして、大使館との間に入り最大にサポートをしてくださった橘先生、ありがとうございました。

歌と踊りは世界共通です。歌と踊りは人の心を豊かにしてくれるだけでなく、言葉の通じない海外の方とも心が通じ合えるようにしてくれます。

最後になりましたが、NPO法人民謡民舞公演実行委員会の益々のご発展と会員皆様のご多幸を祈念しております。



9月新刊

房総のうた
つれづれに ⑤

⑤ 成田盆唄
(千葉県成田市)

千葉県の成田と言えば成田山新勝寺の門前町として発達し、特に江戸中期以降は成田山参詣の人々で賑わっている町です。成田山参詣が盛んになったのは元禄十四年の本堂参詣から現地で本尊開帳を行うと共に江戸で出開帳をして大いに布教してからです。

さて、盆踊りは昭和八年七月、文部省宗教局の盆踊講師・番場憲隆氏を招き、一般の人に踊りを講習したのが始まりと言われています。以来盂蘭盆の当日は、新勝寺境内の奥山広場に櫓を組んで、太鼓の音と共に輪となり夜の更けるのも知らず踊られていました。

昭和六十三年「利根川百景」の自主公演を控えていた頃、流域の民謡を探し歩いている時期でしたので古い資料に接することが出来、そして更に、取材に出掛けたところ、八月十三から十四日、奥山広場で踊っていたのです。もっと何かあるのでは、と思い新勝寺の「仏教図書館」で許可を頂き関連資料を調べてみました。古い時代の資料に記事が見つかり、天にも昇る思いで胸が高鳴ったものでした。その本は貴重な資料で黄ばんでいました。取材したのは昭和六十三年八月十三日でした。大きな収穫で、帰宅してから早速三味線の手付をしたのでした。

ハアー盆はナ(コイサ)

盆は嬉しや別れた人も

(アラセーヨホホイ)

晴れてこの世へハア逢いに来る

(コイコイコイサ)

ハアーどんとナ

どんと叩いた太鼓の音に
あの世この世のハア戸が開く

ハアー踊りナ

踊り踊るなら手拍子たたけ
調子付かなきゃハア唄も出ぬ

ハアー成田ナ

成田良いところ暮れ六つ頃は
胸も休まるハア鐘が鳴る

ハアー仲間ナ(コイサ)

仲間同志の心がうつり
空にまん丸ハアお月様



◆ みんなでCD制作
参加者募集のご案内

いつか、一度は記念にレコーディングして形に残してみたい。永年民謡や三味線をやっていたら、みんな思う事です。一人で、その費用を負担するのは大変なことです、が、みんなで共同制作すれば、少ない負担で制作できます。そこで、今回、共同で、CD制作することを計画しております。ご参加頂ける皆様を募集しております。



◆ レコーディング参加費
について

今回十名から十五名程度募集しております。費用は参加人数により、多少変更する場合がありますが、各々CD百枚で、十八万円程度を予定しております。



秋田県小坂町「康楽館」 岩手県栗石町 出演 二泊三日の旅 参加者募集

年に一度の親睦旅行。今年は岩手県栗石町と秋田県小坂町です。小坂町は明治時代に鉱山で繁栄した、秋田県の最北にあり十和田湖の秋田県側の町です。鉱山の厚生施設として建てられたのが芝居小屋「康楽館」。今回の舞台です。日程は、

十一月八日(金)

鷺宿温泉の宿「赤い風車」宿泊

十一月九日(土) 栗石町体育館

午前十時半から十二時半のイベント

に出演(終了後午後二時、貸し切り

バスにて十和田湖へ出発、午後六時

到着予定) 十和田湖脈山亭に宿泊

十一月十日(日) 午前八時ホテル出発

会場「康楽館」八時半到着。康楽

館でのイベント出演後、十五時半

出発—十七時盛岡駅到着(解散)

◆参加費

お一人五万二千元

(行きの盛岡までの旅費、帰りの盛岡からの旅費は各自手配をお願い致します。)参加の皆様は同封のゆうちょ銀行払込用紙にて九月末までにお振込みください宜しくお願い致します。

開催日決定

第三回千葉の民謡を唄おう

「民謡日本一選手権」

日時 令和七年六月一日

会場 船橋勤労市民センター

◆◆「千葉の民謡の部」
「全国の民謡の部」

「千葉の民謡の部」優勝者には千葉県知事賞(申請予定)「全国の民謡の部」優勝者には船橋市長賞(申請予定)を授与出来るように準備を進めております。今年度の大会の反省を踏まえ進めてまいります。尚、会場が変わりました。引き続き、ご協力下さいますようお願いいたします。

◆民謡民舞の祭典

「春の華まつり二〇二五」

日時 令和七年四月十九日

会場 カメリアホール

ご協力頂き、お陰で会場が決まりました。大勢のご参加をお待ちしております。ご予約下さいますようお願い致します。



つくばエクスプレス「浅草駅」徒歩7分 東京メトロ日比谷線「入谷駅」徒歩10分
東京メトロ銀座線「浅草駅」都営浅草線「浅草駅」東武線「浅草駅」タクシーで5分

◆総会・懇親会のご案内

日時 九月七日十六時から

(十五時半受付)

会場 民謡の店みどり

台東区浅草五―十三―四
〇三―三八七四―二三三〇

◆懇親会参加費 六千円

(当日会場にて申し受けます)

令和五年の事業・会計報告と令和六年の事業計画・予算案を審議頂きます。総会終了後、懇親会を予定しております。大勢の参加をお待ちしています。尚、当日参加できない方は返信ハガキをお送りくださいますようお願いいたします。

◆ホームページが

開設されました

平素は当法人の活動に格別のご協力を賜り誠にありがとうございました。大変遅くなりましたが、この度、当NPO法人のホームページを公開いたしました。今後ともサービス向上のため、ホームページのコンテンツの充実、努め、様々な情報を皆様に発信してまいります。何卒ご活用頂きますようお願い申し上げます。また、ご要望や改善点がありましたらお教えください。どうぞよろしくお願い致します。

ホームページQRコード



QRコードとURLをご案内申し上げます。ぜひご覧ください。

ホームページURL

<https://minyouminbu.com/>

編集後記

今年の夏は連日の猛暑と、日本選手団の活躍で寝不足の日の多かったパリ五輪も、アツという間に閉会式。いかにお過ごしでしょうか。平素は本法人の活動にご支援とご協力を賜りまして誠に有難うございます。お陰で設立してから丸三年。四年目を迎え、四回目の総会のご案内する時期になりました。令和五年度は、第一回、第二回の千葉の民謡を唄おう「民謡日本一選手権」「津軽民謡新春公演」「春の華まつり二〇二四」公演を開催させて頂きました。ご協力有難うございました。引き続きご支援を賜りますようお願い申し上げます。

不定期で発行しております会報、六号にも寄稿頂き有難うございました。この場をお借りしまして御礼申し上げます。誤字脱字等がありましたらお許し下さい。次号は年末か年明けを予定しております。テーマは何でも結構です。民謡に関することでも結構です。我が人生、思い出す、最近の出来事等々寄稿下さいますようお願いいたします。引き続き協力下さいますようよろしくお願いします。連日の炎暑でお疲れをお出されませんよう、くれぐれもお自愛ください。

(三宅良二)